

絵画修復家のアトリエから

加賀優記子……絵画修復家

ループル美術館では、私たちは美術館に展示されている油彩画作品の修復と、そしてループル宮殿内の天井画修復も担当していました。

ループル宮殿には、素晴らしい絵画、彫刻等のコレクションの外に、それらが置かれている大変華やかな装飾の施された天井画の描かれたサロンにも、一見の価値があるものが多くあります。その中には、18、19世紀に画かれた天使や神話の世界など優美な題材のものや、あまり知られてはいないことですが、近代に描かれたジョルジュ・ブラスクによる青と黒の鳥のモダンな図柄の天井画等もあります。

私たちが修復を行った、19世紀の画家ブロンデ

ルによって描かれた天井画のあるサロンは、ループル美術館のリニューアルに位置し、エジプト美術の小品を陳列しているサロンに続く、ルイ16世の居室にあった調度品を展示している部屋でした。ブロンデルという画家は、日本では有名ではありませんが、ルイ・ダビッドの影響を感じさせるしつかりとしたデッサンと鮮やかな色使いが印象的な、パリでは通りの名に冠される程に評価された画家でした。しかしこのサロンは革命以後まだ一度も洗浄されたことのなかったため、天井は真黒に煤け、(革命後、ループル宮は一時市民によって占拠され、サロンで焚き火を焚かれていた事もあるらしい。)



ループル美術館。ルイ16世の間、天井修復現場。

さて、天井画修復の作業は、まず汚れた画面のクリーニングからはじまります。システイナ礼拝堂のミケランジェロ(最後の審判)の洗浄には、AB-57と名づけられた各種の溶剤が調合された溶剤が使われましたが、フレスコ画のこの様な作品と、ブロンデルのような漆喰の上に直接油彩で描かれた作品では、使用される薬品はケースごとに違ってきます。この時は少量のアンモニウムや特殊な洗剤、中和剤、大量の水が汚れを落とすのに使われました。そしてこの後にやはり大量の有機溶剤を用いて黄変した古いタンマルニスを取り除かれました。

天井画の修復というものは、基本的な画面の洗浄などについては普通のキャンパス画の修復作業とあまり変わるものではありません。ただ画面が巨大であることによって、使われる薬品の量が膨大になること、それに対し、天井をあたかもひとつの天井の低い部屋のように足場で空間を仕切ってしまうため、空気の流通がない上に、1000ワットの投光機を何台も置くこともあり、特に夏場は大変な悪環境のもとで作業をすることとなります。そして大変なのは水! 何リットルという水を大きなポリバケツに入れて、高い梯子を登らなければなりません。こういった力仕事は辛いなことに私のチームには屈強な男性が何人もいて助かりましたが、私にとつて問題だったのが、組まれた足場の高さ、だったのです。真上を向いてコ

ットンで画面を拭おうとしても、どんなに背伸びをしてもあと2、3センチ足りなくてどうしても絵にとどきません。それで仕方がないので、いちいち踏み台にのって作業をするしかありませんでした。

しかし何と言っても一番辛かったのは、ずっと上を見上げていなくてはならなかったことでしょ。午前中の作業を終え、ループルの社員食堂に昼食に行っても、私達全員あまりの首の痛さに下が向けず、スパゲティが食べられなくて、大笑いしたこともありました。



ループル天井画修復。補彩作業をする筆者。

ミケランジェロは大作を描く際に、車輪をつけた背の高い寝台を用意したと聞きましたが、この作業の間中、つくづくそれは必要だと感じていました。

天井画の作業を進めている間に、窓から眺めるチュイルリー公園に面したループルの中庭は、ほとんど巨大な地下が掘り進められていきました。この作業は見ていると、ある部分は遅々としてなかなか進行していないように見えます。が、これは、ランポール兄弟の作品の(ペリー侯のいともし華麗なる時待書)の中にも描かれている、中世の時代に造られた、ループルの城砦遺跡を発掘しているためでした。(当時のループルの社員食堂には、こぎれいなラボや美術史関係の学者に混じっ

て、土でどろどろに汚れた遺跡発掘者の大勢の人達や、私達のように、頭から天井の汚れた水をかぶりひどく汚れた白衣と、ニスをコンプレッサーで吹きつけたために髪の毛が逆立ってごわごわのままドヤドヤとサロンに入ってくる者など、色々な人間が行き交っていました。)

現在は、ループルのピラミッドの入り口からシユリー翼のゲートを通れば、その遺跡を見る事ができます。

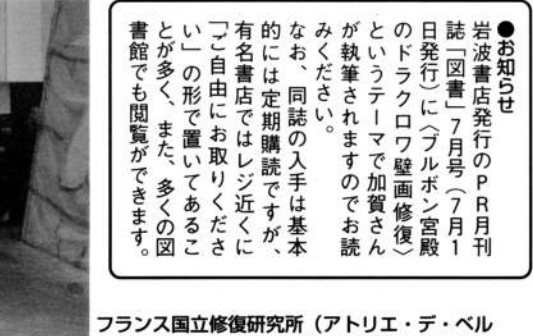
私は知人をループルに案内するときは、必ずこのゲートから入るようにしています。何故ならその石積みされた城砦跡の眺めは全く壮観であるし、ループルの発祥がよく理解できるからです。ただ、残念なことに、昔知り抜いていたループル美術館の中を、今はあまりすらすらと案内することができません。確かあそこにあったはずの絵画が、思わぬところに移動してしまっているからです。

そんなループルを歩きつつ、私は懐かしく昔を思い出します。

時には休日日のループルに、一人で仕事場に早めに行つて作業をすることがありました。

勤務者用の通用門のある、宮殿後方の入り口でセクレタリーからまるで魔法使いの物のように大きな鉄の輪に古めかしい鍵が引っかかっている鍵束を受け取り、まずエレベーターで3階上

●お知らせ
岩波書店発行のPR月刊誌「図書」7月号(7月1日発行)に「ブルボン宮殿のドラクロワ壁画修復」というテーマで加賀さんが執筆されますのでお読みください。
なお、同誌の入手は基本的に定期購読ですが、有名書店ではレジ近くに「自由にお取りください」との形で置いてあることが多いです。また、多くの図書館でも閲覧ができます。



フランス国立修復研究所(アトリエ・デ・ベルサイユ)にてドラクロワ作品を修復中の筆者。

かがゆきこ●絵画修復家。大学卒業後、絵画の古典技法を学ぶためにパリに留学。ループル美術館の絵画修復員を経て、現在は鶴沼で修復工房を主宰。